

へら台^{だい}

今、皆さんの家庭ではどのような裁縫^{さいほう}道具がありますか。現在では、着るものも既製品^{きせいひん}の服が安く手に入り、雑巾^{そうきん}でさえ100円ショップで購入できます。そのため、家庭において裁縫をする機会は減っています。戦後から昭和30年代頃は、普段着の洋服は手作りする人も多く、ミシンは洋服ダンスや三面鏡^{さんめんきょう}と並び代表的な嫁入り道具の一つでした。また、着物^{きもの}(和服)を日常生活で用いていた頃は、家庭での裁縫は「針仕事^{はりしごと}」とって、女性の重要な仕事でした。そのため、着物を作るのに必要な和裁道具は嫁入り道具の基本であり、どこの家庭にもあった道具でした。

和裁道具の一つであるへら台は、裁縫の際に、へらで布にしるしをつけるために使用する台ですが、まち針を打つ、アイロンやコテをかける、布を裁^たつ時の台としても使用しました。家庭用は6面の折りたたみ式で収納でき、へら付けの際に布質を傷めないボール紙で作られています。

また、家庭用のへら台は裁縫の教本^{きょうほん}も兼ねており、数十種類の男物・女物・子ども用着物の裁ち方が寸法^{すかい}と図解で印刷されています。着物の寸法は鯨尺^{くじらしゃく}(1尺=約38cm)が使われていますが、1921年(大正10)に日本でメートル法が公布され、1966年(昭和41)には、長さなどの単位はすべてメートル法を使用することになります。そのため、図解では鯨尺とメートル法の単位が併記^{へいき}されています。

このへら台を通じて私たちは、家庭における裁縫のようすや、日本における単位表記が移り変わる時代を感じることができます。



縦40cm・横29cm(六面折) 岡崎むかし館蔵